

『氷点』に見られる〈嫉妬〉の構造

* 小田島 本有

Motoari ODAJIMA

The structure of “Freeze Point”

一

本日は『氷点』に見られる〈嫉妬〉の構造」というテーマでお話することになりました。なぜ、このようなテーマにしたのか。私はここ十年ほど市内で公開講座を行っています。受講生は中高年の女性の方が多いんです。女性の方々はこのようなテーマが好きなんですね（笑）。

さて本題に入りますが、『氷点』は言うまでもなく三浦綾子のデビュー作であると同時に代表作です。一九六四年（昭和三十九年）、この年はちょうど東京オリンピックのあった年ですが、この作品は朝日新聞の懸賞小説で一位を獲得しました。七三一編の応募があったといえます。賞金額が一千万円。しかも作者が旭川市内で雑貨店を経営する主婦。さらに娘を殺した殺人犯の娘を引き取る、という状況設定の特異さが大きな話題を呼びました。翌六五年（昭和四〇年）には朝日新聞に連載が始まり、六六年（昭和四一年）にはテレビドラマ化され、空前の『氷点』ブームが生まれました。

今でも日曜日の夕方五時半になると『笑点』という番組が始まります。あれは私が小学生のころからやっている長寿番組ですが、あの「笑点」というタイトルが当時大ブームだった「氷点」をもじっているんです（「へえー」という声）。あれ、御存じない方もいらっしゃるんですね。それほど『氷点』は話題を呼んだ作品なのです。

二

『氷点』の冒頭は辻口家の応接間が舞台です。夫の啓造は出張のため不在。そこには妻の夏枝と、啓造の経営する辻口病院の眼科医である村井の二人がい

ます。

なぜ二人が辻口家の応接間にいたのか。実は夏枝が村井を呼んだのです。表向きの理由は村井に縁談を進めるためでした。しかし、ここには夏枝なりの意図があったのです。かねてより、彼女は村井が自分に気があるらしいことを感じていました。その村井に縁談話をもちかけ、その苦しむ表情を見ることで自分の対する思いを確認したい。それが夏枝の狙いでした。したがってこのときは、夏枝にとって自分が女性としての魅力を持てているのかどうかを確認する大切な時間だったのです。

そこに娘のルリ子が入ってきます。夏枝にしてみるとこの大切な時間を幼い娘に邪魔されたくないという気持ちがありました。そこでルリ子をやや疎んじる態度をとってしまうのです。ルリ子はこのため外へ飛び出して行きました。

このようにしてルリ子は行方不明となり、翌朝彼女は美瑛川の近くで死体となって発見されました。犯人は佐石土雄という男でした。しかし、彼は逮捕後まもなくして自殺してしまいます。

犯人の佐石が自殺したことで、啓造の憎しみの対象は夏枝と村井に集中するようになりました。そこには明らかに〈嫉妬〉の感情があったのです。なぜ二人は夫の留守中に応接間で会っていたのか。そもそも二人はそこで何をしていたのか。啓造は疑心暗鬼になります。

事件のあった日、啓造は予定を早く切り上げて帰宅しました。応接間に煙草の吸殻があるのを彼は目ざとく見つけます。しかし、妻の夏枝はいったい誰が訪れていたかを自分から言おうとしません。彼女の口から村井の来訪が伝えられたのは、ルリ子の姿が見えなくなってからでした。このことがよけいに妻へ

の不信感を募らせる結果となったのです。

ところで「嫉妬」という漢字ですが、いずれの漢字も「女偏(おんなへん)」が使われています。では、果たして「嫉妬」は女性の専売特許でしょうか(首を振る人が多数)。答えは否です。男性だって嫉妬します。それは『氷点』を読むと明らかです。

ちなみに、「想像」と「妄想」は違います。「想像」をするにはある一定の根拠があります。ところが「妄想」の場合、根拠を必要としません。妄想は無責任に拡大し、人はそこで苦しむのです。

「羨望」と「嫉妬」も似ているようで明らかな違いがあります。たとえば、我々がお金持ちを羨んだりする。「あれだけのお金持ちになって優雅な生活をしてみたいわ」などと思ったりします。これは羨望です。しかし、例えば目の前を好きな人が自分とは別の異性の人と一緒にいるのを目撃したとする。本来はその異性とは自分が一緒にいるべきなのに、そこには全く別の人がいる。そう考えると人はカアーツと感情が燃え上がります。これは明らかに「嫉妬」です。「羨望」は自分とはかけ離れた存在に抱く感情であるのに対し、「嫉妬」はもっと身近であるゆえ、生々しさが伴います。

啓造は辻口病院の院長。社会的名声もあり、紳士としてのイメージも定着しています。そういう彼はみつともない姿を曝け出すことができません。いきおい自己抑制的になってしまします。応接間で煙草の吸殻を見つけたのなら、「誰か来ていたのか?」と尋ねれば済むことです。しかし、彼にはそれができません。そのため、彼の頭の中では妄想が拡大するのです。啓造の頭の中では村井と夏枝のみだらな姿が思い浮かび、それに彼は苦悩します。啓造の妄想においてこの二人は深い不倫関係として揺らぐことはありません。

一方、夏枝してみると、自分が夫にこれほどまで憎まれる筋合いはないという思いがあります。この認識の差において、この夫婦間での溝は決定的なものになっていました。先ほども申し上げたように、啓造は直接相手に問い質すということができません。その分だけ逆に感覚だけは研ぎ澄まされています。ちよつとした違いにも敏感に反応し、彼は無口になったり不機嫌になったりします。そうなれば夏枝にも啓造の異変は分かり、彼女の口を重くすることになるわけです。

三

ルリ子の死は夏枝にとってもショックだったことは言うまでもありません。彼女は精神的におかしくなり入院を余儀なくされます。さすがにその姿を見た時は啓造も彼女をいたわりたい思いにも駆られます。

その夏枝もやがて回復し、退院します。すると彼女は女の子がほしい、その子を死んだルリ子だと思つて育てたい、と強く啓造に迫るようになります。夏枝は既に子供の産めない身体になっていました。そう言うとき、夏枝は子供を引き取りたい、そのことを高木さんに頼めないかと言いつつ出します。

高木は啓造の学生時代からの親友で、乳児院と深い関わりを持っていました。そして啓造は、佐石の娘がその乳児院に引き取られたという話を聞いていました。夏枝の執拗な要求を聴いているうちに彼の胸に閃いたものは、実に恐ろしいもの、すなわち佐石の娘を自分の家で引き取ろう、だが、その娘の出生については夏枝には隠そうというものだったのです。

このところは多少の説明が必要です。こう考えたとき、啓造の心には明らかに夏枝に対する復讐の念がありました。嫉妬心が憎しみに変わり、夏枝に対して邪悪な心が生まれていたことは否定できません。

しかし、その一方で、彼には相反する心もありました。それは夏枝の父親で、啓造の大学時代の恩師でもあった中川教授のよく口にしていた言葉、「隣人を愛せよ」の実践です。

『氷点』を読んでいると、ともすれば前者のほうばかり関心が向けられがちですが、その相反する感情を同居させていたところに啓造の心の複雑さがあつたのです。

啓造は夏枝の友人である辰子から、高木が「辻口の奴、まさか犯人の子を引きとるなんて言わないだろうな」と語っていたことを聞かされます。高木のこの発言が啓造に影響を与えたと言っても過言ではありません。高木は昔から啓造に対して絶大な信頼感を寄せていました。若い頃、高木は夏枝に恋心を寄せており、夏枝の相手が辻口以外の男なら諦めないと言っていたほどでした。啓造はこのように高木からの信頼感を感じていたのです。つまり、啓造はいつも高木の前では「期待される人間」であらねばなりませんでした。自分の娘を殺した犯人の娘を引き取る、という発想はいかにも突飛な思いつきに感じられま

すが、そこには高木に対する意識が強く働いてもいたのです。

啓造からの申し出に高木は当然のことながら最初は反対しました。しかし、最終的には啓造の申し出を受け入れます。そして事実をすべて知っているのは啓造と高木のみでした。

子供は「陽子」と名付けられ、辻口家に引き取られます。夏枝は陽子を溺愛します。しかし、啓造は「隣人を愛せよ」という言葉を実践することの難しさを痛感させられます。彼は幼い陽子を抱いてやることもできません。陽子を見るたび、啓造には「これは佐石の娘だ」という意識がよぎるのです。そのような啓造の思いとは裏腹に、陽子は明るく健やかな女の子に育っていきます。自ら行動して厄介な状況を作り出し、そこで苦悩する。それが辻口啓造なのです。

啓造はこのように絶えず悩んだり、反省したりする人間です。一方の夏枝は本質的に反省をしない人間です。この夫婦は実に対照的であると言えるでしょう。

三

啓造以外の人物も嫉妬しています。

啓造・夏枝夫妻の長男である徹は中学校三年のとき、たまたま帰宅した際に両親の口論を偶然耳にします。このとき徹は陽子の出生の秘密を知ったのでした。それまでも妹の陽子を可愛がっていた徹でしたが、これ以後彼は陽子を妹としてではなく異性として強く意識するようになります。

その後の徹は陽子を〈妹〉として見る眼と、〈異性〉として見る眼との間で心が揺らぎます。やがて彼は北大に入学するのですが、そこで出会った親友北原を旭川の実家に呼び寄せます。これは彼を陽子に引き合わせるためでした。ここにはあくまでも陽子の〈兄〉として振る舞おうとする意識が読み取れます。

北原と陽子は互いに惹かれ合い、親密になります。その様子を目の当たりにすると徹の苦悩は募ります。ここには明らかに〈嫉妬〉がありました。自分で辛い状況を作り出して結果的に苦悩する。その点で啓造と徹はやはり正真正銘の親子でした。

次に夏枝の場合を見てみましょう。当初、徹が親友の北原を連れてくると連絡してきたとき、夏枝はあまりいい顔をしませんでした。ところが、いざ北原

が現れてみると、夏枝の態度は豹変します。それこそ息子の親友であることを忘れたかのように、夏枝は異常なまでの接待ぶりを示すのです。

北原は幼くして母親を失っていました。彼は夏枝を母親に見立て、親孝行をさせてほしいと言って肩を揉んだりします。それを夏枝はこともあろうに勘違いします。そして北原と陽子が親密になっていく様子を目の当たりにすると、彼女はこの二人の関係が発展するのを阻止するような行動に出ます。北原から陽子に届いた手紙を「お母さんにも読ませてほしい」と受け取ると、それを陽子に断わりもなく北原に返してしまうのもそうだし、北原が若い女性と写った写真があるのを見つけると、「この女性が北原さんの恋人という方かしら」と何の根拠もなしに言つてのけたりする場面がそれです。

夏枝のこれらの行動の裏には、犯人の子を幸せにしてみたまるか、という反発の感情がありました。しかし、これだけではありません。ここには、夏枝の陽子に対する一女性としての〈嫉妬〉の思いが介在していたのです。

夏枝が幼い陽子と二人で歩いていた頃、すれ違う人々の視線は夏枝に向けられていました。しかし、陽子の成長と共に、人々の視線は夏枝ではなく瑞々しい陽子に向けられるようになります。いくら美貌の誉れ高かった夏枝も加齢による衰えは隠しようありませんでした。そのことを夏枝は敏感に感じ取っていたのです。

北原にとって夏枝はあくまでも親友の〈母〉であり、それ以外のものではありませんでした。ところが、夏枝にとって北原は息子の〈親友〉ではなく、あくまでも魅力ある〈男〉だったのです。陽子に届いた手紙を本人に断わりなく北原に返す時も、彼女は北原と二人で会う場面を作ります。そして街を二人で歩いているときも、彼女は北原に向かって「私たち、周りからはどう見えるでしょうか」と尋ねて北原を啞然とさせています。我々読者から見ても、この場面は思わず失笑してしまうところですが、このときの夏枝は完全に舞い上がっています。夏枝にしてみれば、幾つになっても自分は〈女〉なのでした。夏枝の的外れとも思われる発言も、自分が今でも魅力ある〈女〉であるのかどうかを確認する大事な事柄だったのです。

一方、陽子の場合も〈嫉妬〉とは無縁ではありませんでした。「この写真の人が北原さんの恋人という方かしら」という夏枝の発言を聞いて、陽子はその真偽を確かめることもなく、北原との連絡を絶つてしまします。ここには明らか

に〈嫉妬〉がありました。陽子が北原や徹に直接尋ねていれば、写真に写っていたのは北原の妹だとすぐ分かったはずですが、陽子は「北原さんの恋人」という言葉を聞いただけで冷静さを失ってしまったのです。

いま、徹、夏枝、陽子、それぞれの場合を見てきましたが、このように『氷点』の登場人物たちはいずれも嫉妬しています。我々は誰もが嫉妬とは無縁ではられません。

四

途中夏枝の邪魔が入ったりするという困難を伴いながらも、北原と陽子の関係は復活します。そして北原は辻口家を訪れ、夏枝の前で「陽子さんのお付き合いを認めてもらいたい」と申し出ます。もちろん、陽子との結婚も視野に入れていることを北原は隠そうとしません。そのとき、夏枝は二人の交際を認めるわけにはいかない。それは「北原さんに気の毒だから」と意味深長なことを言います。夏枝はいつか機会を見つけて陽子の出生の秘密を暴露してしまいたいという欲求に駆られていました。ですから、この場面はそのような展開になるよう、夏枝は仕向けていたのです。

「北原さんに気の毒だから」という言葉は聞き捨てならないものでした。北原はもちろん、陽子も夏枝がそのように言う理由を聞かせてほしいと言います。夏枝はこの言葉を待っていました。自分は陽子の秘密を暴露するつもりは本来なかった。暴露せざるをえなかったのは当人たちに促されたからだ、という逃げ道を夏枝は用意する必要があったのです。

そして夏枝の口から秘密が明かされます。当然陽子はショックを隠しきれません。一方の北原はそんなはずはないと言いながら陽子を励まし、「高木に真実を確かめに行ってくる」と言い残して家を出ていきます。

陽子はそれまでけなげに、我慢強く生きてきました。そこにはたとえ自分が夏枝から冷たい仕打ちを受けようとも、「自分さえ正しければ」という強い自己肯定の気持ちがありました。その姿が夏枝の目には小憎らしく映っていたのも事実なのです。

おまえはルリ子を殺した犯人の娘だ、と伝えられたとき、陽子はそれまで自分に向けられた夏枝の仕打ちの意味を理解しました。そして、それまであれほ

ど〈正しさ〉にこだわってきた自分の身体の中にも殺人犯の血が流れていると知ったとき、陽子の築き上げてきた自信と誇りは崩壊し、彼女は自殺を決意することになります。

しかし、ここには陽子の誤解があったと言わざるを得ません。陽子は、殺人犯の娘だと告げられることによって、自分も人を殺す可能性があるのだと認識するのですが、親が殺人犯であろうとなかろうと、誰もが人を殺す可能性はあるのです。この私も、そしてこの会場にいらつしやる皆さんも例外ではありません。〈殺す〉〈殺さない〉は結果だけから見ると大きな違いですが、実はこの両者が紙一重の関係にあることが『氷点』を読んでいるとよく分かります。

具体的にみて行きましょう。

佐石土雄の場合、妻が出産後まもなくして亡くなり、乳児の面倒を自分が行なくてはなりません。日雇い労働をしながらの育児ですからすっかり疲れきってしまい、赤ん坊の泣き声に悩まされ、家を飛び出します。そしてたまた歩いていたときに偶然出会ったのがルリ子でした。ちょうどお祭りの日です。ルリ子を連れて川原まで行くとしたいに薄暗くなり、ルリ子が泣き始めます。その泣き声を聞いた時に彼は日頃の精神的な疲れも影響して、思わずルリ子の首を絞めてしまったのです。

夏枝の場合は、偶然夫の日記を読んで、陽子の出生の秘密を知ったときがそれに当たります。事実を知って夏枝はしばらく呆然とします。そこに陽子が小学校から帰ってくるのですが、夏枝は絶望感に打ちひしがれ、「お母さんと一緒に死ぬのよ」と言って、思わず陽子の首を絞めます。陽子はもがき苦しみますが、そのとき夏枝の脳裡に啓造や徹の姿がかすめ、彼女はやがて手を放します。これ以上絞め続けていれば、陽子は死んでいたに違いありません。

そして、啓造も例外ではありませんでした。啓造には忌まわしい思い出がありました。彼は大学生の頃、幼い女の子にいたずらをしたことがあったのです。その後、街で成長したその子と出会うと、彼女は啓造を蔑んだ目で彼を見るようになり、彼は「あの子が死んでくれればいい」と心の中で願うようになります。啓造がいたずらをしたとき、その幼女は泣きませんでした。しかし、そのとき彼女が泣いていたらどうなっていたでしょう。佐石土雄と同じように、その子の首を思わず絞めていた可能性は高かったと言わざるを得ません。

今、佐石土雄、夏枝、啓造、それぞれのケースを見てきましたが、これらか

ら明らかなのは〈殺す〉〈殺さない〉というのは、実は偶然的要素に左右されているということです。そして、その紙一重の部分で我々に〈殺す〉ことを何か食い止めさせるものがあるとすれば、それを我々は理性とか良心、あるいは道徳と呼んだりしているのです。

我々が生身の人間である以上、〈嫉妬〉と無縁ではられません。〈嫉妬〉は人間だれしも持つ感情であり、言ってみれば〈嫉妬〉は人間が人間たる所以なのです。大切なことは、我々がこの〈嫉妬〉とどう向き合っていくのかということです。

人間は本来愚かな生き物です。戦争はいけないと誰もが言いながら、戦争を人間は長い歴史の中で繰り返してきました。大切なのは、我々がその愚かさを自覚すること。そうしてはじめて、我々はその愚かな過ちを繰り返さないよう考えます。そこにはじめて知恵や賢明さが生まれるのではないのでしょうか。その努力の中で我々は余計なトラブルを抑えることが可能になってくるようにも思います。

『氷点』の最後では、高木の口から陽子が殺人犯の娘ではなく、実母の三井恵子が夫の出征中に実家で下宿していた大学生との間に産んだ娘であったことが明らかにされます。それでは、それまでの夏枝の陽子に対する仕打ちはいったい何だったのか。読者はある種の空しさを覚えずにはいられません。

服毒自殺を図り、昏睡状態を続けていた陽子ですが、その彼女が意識を取り戻す可能性を示唆したところで作品は終わります。やがて目覚めたとき、彼女は自分の出生の事実を知らされるでしょう。しかし、殺人犯の娘ではなかったということは陽子に何の解決ももたらしません。

陽子は生まれて間もなく乳児院に預けられました。陽子からすれば、彼女は〈捨てられた〉のでした。それまで〈正しさ〉にこだわって生きてきた陽子からすれば、実母は〈正しさ〉から外れた人間だったのです。彼女が実母を許せないというのはその点からすれば無理からぬところがありました。彼女が今まで通り、自分がそれまで大切にしていた〈正しさ〉にこだわる限り、三井恵子を許すことはできないでしょう。『氷点』から四年半後に『続氷点』が発表されますが、『続氷点』がこだわったのがこのテーマでした。それまで純粹培養された中で自らの〈正しさ〉にこだわってきた陽子が、これから多くの人々と関わって行く中で彼女自身が矛盾を抱えなくてはなりません。人間が本来矛盾を抱

えた存在であるならば、陽子はこのとき本当の意味で生き始めたと言えるのです。

以上限られた時間の中でしたが、『氷点』はこのように我々人間の普遍的な姿を描いています。それがこの作品の魅力であり、多くの読者がこの作品に惹きつけられる大きな要因になっていると言えるでしょう。